

カトリック山手教会月報

やまて



編集・発行 カトリック山手教会 広報委員会 〒231-8652 横浜市中区山手町44番地
 ☎ (045) 641-0735 <http://catholicyamate.org/>
 第654号 2024年8月11日

山手教会史の空白を埋める発見(2)

横浜開港資料館所蔵

THE JAPAN WEEKLY MAIL May 19, 1906

ザ ジャパン ウィークリー メール

(明治39年5月19日付)

「聖心教会の献堂」(訳)

この数か月、横浜Bluff(山手)44番の適地に建設中であったローマ・カトリック教会の献堂・祝別式が予定どおり日曜日(5月13日)に挙行された。天候は残念ながら荒天で、予定された儀式の一部中止を余儀なくされたが、この予想外の気象状況により、信徒数を上回る多数の住民出席を座席数の範囲内に収めることができた。

司式者は、Osouf(オズーフ)東京大司教の補佐であるP. X. Mugabure(ムガブル)司教であったが、オズーフ大司教は健康状態により出席できなかった(*)。ムガブル司教は祭儀の任にあたる多くの聖職者に伴われた。補佐役はF. Lemarechal神父(**)、輔祭役のP. Rey神父、副輔祭役のJ. Daumer神父と式長のP. Mayrand神父であった。司教は十字架奉持者を先頭にした総勢30人余とともに香部屋を出発して儀式を開始し、正面玄関まで行列を行った。短い祈禱が唱えられた後、賛歌(anthem)「汝はヒソブもて我を灌水す」が歌われた。司祭が詩編50(現行の51)「我を憐み給え」を朗読し、司教が聖水を

外壁に灌水した。更に祈りのあと行列は聖堂に入室し、祭壇に到ると諸聖人の連祷が司教と奉仕者たちによって歌われた。そして、聖歌隊により賛歌「主よ汝の名に向けて建てられしこの家を祝し給え」が歌われた。更に3か所の詩編「苦難の内より主を呼ぶと」(119:現行120)、「我は目を上げて山々を仰いだ」(120:121)そして「(主の家に行かんと)人々が言いし時、我は喜びぬ」(121:122)が歌われている間、司教は壁に撒水しながら堂内を巡回した。聖堂のすべてを祝別し、オルガンを奉獻してミサが開始された。

祝儀に選ばれたミサ曲は、グノーの「Messe Solennelle」(荘厳ミサ)(1855年)(***)であった。これは、正直に申せば小規模な聖歌隊には少々大曲に過ぎた。幅広く堂々としたハーモニーに富むミサ曲にしては、彼らの目の粗さが目立ったが、これは少々バランスを欠いた聖歌隊編成による。我々の見解としては、アルト、テノール、バスのパートにもう少し声量を加えることで、このグノーの曲の美しさを高められたことであろう。にもかかわらず彼らの名誉のために申せば、聖歌隊員は、かなりの難曲に対して全く大胆な挑戦をした。合唱は、あふれる熱意(spirit)と集中力をもって歌われた。独唱者はMiss Mendelson、Mr.CooperとMr.Somertonであり、彼らの演奏へのコメントは不要である。その歌唱はミサ曲に用いられた種々の三重唱でよく共鳴し、独唱に関しても称賛の他なかった。

Papinot(パピノ)神父(****)は、式の前半でオル

ガンの傍にあってミサ曲を指揮し、その間Mr.W. Karl Vincentがオルガニストと音楽監督を務めた。

(以下 次号(3)に続く)

(*)ピエール・マリー・オズーフ初代東京大司教は同年6月27日78歳で帰天。

(**)原文の頭文字はFであるが、Jean Marie LouisのJの誤りか。Jであれば明治期の歌詞聖歌集編集者ルマレシャル師(1842-1912)。

(***)聖セシリア荘厳ミサ曲。1855年11月22日聖セシリアの祝日にパリ、サン・トュスターシュ教会で初演、シャルル・グノー(1818-1893)の宗教曲を代表する作品。ちなみにグノーは、若き日に聖職者を志したこともあり、パリ外国宣教会の宣教師が任地に赴く派遣式で歌われるLe Depart des Missionnaires「出発せよ、福音の先駆けとなる者たちよ」を1860年に作曲している。

(****)(1860-1942)1903年献堂の山形県・鶴岡教会〔重要文化財〕の設計者として知られる。また開国後最初期の聖歌集『聖詠』(1883年)に同師が伴奏譜を付した『日本聖詠』(1907年横浜で改訂版を出版)を見れば、作曲家、オルガニストでもあった。